論文 研究紀要，第3号：13－21，1999.

家庭教育とジェンダー

—家族臨床の視点から見えてくること—

中釜洋子

＜キーワード＞

家庭教育　ジェンダー　家族臨床　事例研究
ジェンダー・バイアス是正と高い自尊感情獲得の試み

＜要旨＞

約半数の日本人の親たちが、男子と女子は異なる育て方をしたほうがよいという考えを今なお支持する報告がなされている。このタイプの親たちは、しばしば、女子には親切で心優しく家族を大切にすることを、男子には強い意志と責任感を持つことを期待している。子どもの性別に基づく親の異なる期待は、常にではないが、ときに性差別的な家庭教育のあり方を醸成する。女子達にとってこの状況は非常に不公平である。女子達は家族のために大いに貢献することが求められるが、ある種の家庭では彼らが果たした努力は、ほとんどそれと認められず報われることがない。

性差別的な環境のもとで少女達がどれほどのダメージを被るかを示すために、ここでは著者が担当した二つの臨床事例を提示する。治療的介入が次のような手順で導入された。まずはじめにセラピストはクライエントに不公平な扱いを受けた経験について思い起こし、それをセラピストの前で言語化するように奨励した。次いで、クライエントの家庭生活の中で重要な役割を担っている家族メンバーに向かって、現実の女性としての姿を開示するようにクライエントを励ました。このような経過を辿って、クライエントはついに感情を統制し、家庭生活における自分の問題に対して自分で決断を下し、解決策を見出すことが出来るようになっていった。

クライエントが成し遂げたことは、劣っているとか価値が無いという自分自身のうちにあるジェンダーバイアスを払拭し、家族の中での独自性を受け入れ、自尊心を高めることと言えよう。セラピストが自分自身のジェンダーイメージをはっきりと自覚しておくことが、望ましい結果を得るために重要であることが併せて論じられた。

1. はじめに

家族が変わった、あるいは変わりつつあると言われる。少産化、女性の晩婚化や非婚化、家族の個性化、多様化、さらに育児不安や児童虐待といわれる事例の激増など、これまで日本社会があまり経験してこなかったような事態がメディアによって盛んに取り上げられている。新しい変化を指して、まさに家族が崩壊に瀕していると唱える論、また、欧米などに比し依然として低い離婚率や婚外子率を示し、わが国の家族の健在性を述べる立場など、家族をめぐってさまざまな見解が、百花繚乱のごとく存在する今日である。

本論の目的は、家族臨床あるいは家族心理学の視点から、「家庭教育とジェンダー」について論じることである。家族の表面上の変化に対し、依然として変わらず、また変わりきれずにいる部分に照準を合わせる作業となろう。まず始めに、家庭教育が内包する明示的・非明示的な（隠れ

た）ジェンダー・バイアスがどのように世代から世代へ受け継がれてゆくのか、その流れを示したい。ついで、家庭内のもろもろのバイアスの是正を援助するための試みとして家族臨床を位置づけ、名実ともにそれが保障されるために有効な働きかけ、そこに参与する専門家に求められる姿勢について検討したい。援助のための臨床活動の枠組みについて論じることを論文の第2の目的とする。

2. 家庭教育が内包するジェンダー・バイアス —いくつかの調査研究の結果から

1994年の東京都生活文化局の調査によれば、『子どもの性別による育て方の違いについて』わが国の45.6％の親が「女の子は女の子らしく、男の子は男らしく育てた方がよい」という考えを肯定している。そのような親は欧米諸国で6.3から28.2％であることを考えると、性別による育て方の違いを肯定する傾向は、日本の家庭文化の中で依然として強固である。

また、同じく東京都生活文化局の調査（1993）によれば、男女児に対する親の期待の差が次のように示されている。つまり女子には、「思いやり」があり、「素直」で「言葉遣いや礼儀作法がよい」「家庭を大事にする」ことを、また、男子には、「判断力」があり「独立心」を持って困難にひるまず「思ったことを遂行する」「責任感がある」ことが強く求められる。いずれも人として重要な資質だが、極端に両性に分け持たれるとき、しばしば問題を発展させる。前者は人と和する方向への要求で、行き過ぎると自分を犠牲にしたり、他者尊重や没我の精神にすり替わりやすい。また、後者は自己決定を促す期待で、過剰になれば他者に目を向けず相互交流に身をまかせることが苦手な自己本位な人間を育てかねない。

いくつかの実証研究が示すように［古澤ら、1981 482-483］、性差に基づく親の期待の差が、子育ての非常に早い時期から養育行動の差を生むなら、男女別の養育・教育目標を掲げる約半数ほどの日本の「家庭教育」は、それぞれの性に対してどのように異なる教育活動を展開してゆくのだろうか。そしてそれは子ども達にどんな影響を与えるのだろう。これらの問いに詳細に答えるため、以下、事例研究的手法に方法を移して論を展開しよう。

3. 家庭で世代から世代へと伝承される性別役割意識 —2つの事例の検討から

筆者の自験例の中から2事例を提示する。いずれも、女子であるための育てられ方の不公平感について自発的に言及し、カウンセラーである筆者がカウンセリング・プロセスのおりおりにジェンダーの問題を意識した事例である。クライエントその人に問い合わせ、このような形である部分の資料を掲載する了承を得た。筆者がプライバシーに充分配慮して原稿にまとめ、その後、当事者による修正を受けている。この先、3.、4.と同じ事例を素材に論じてゆくが、3.では、インテーク期に行われたやりとりをもとにそれぞれの事例の概要と家族状況について提示し、ジェンダーの観点から考察を加えたい。

(1) A子の事例その1

A子は「娘が可愛いと思えない、ついかっとなって叩いてしまう。」という理由で相談機関を訪れた30代はじめの女性である。3歳になる娘の母親で、子育てがうまくゆかない。特にここ数ヶ月ほど、ますます反抗的な娘の様子に感情が刺激され、いけないと知りながら娘を叩いてしまう。先日は、頑として食事を口に入れない娘を叱っていて、気づいたら横にあった物差しを手にとっていた。さすがに恐くなってそのことを夫にうち明けた。はじめ、軽いノイローゼ程度にしか受け止めなかった夫も、妻の何度かの訴えにようやく事の重大さを感じ、相談に行くことに同意。カウンセリングが受けられる機関探しを手伝い、自分も同行することにした。

セラピストが、「よく夫にうち明けることができた、なかなかむずかしいことだと思いますが」と言うと、A子いわく「私にとって彼は一番の理解者で、何かにつけて補ってくれる。自分自身の異常な面をうち明けるのは恐かったが、とにかく話さなければいけない、と思って・・・」。夫は、神妙な面持ちで聞いている。

二人は、大学時代に出会った。なるべく早く実家から消えるようにいなくなりたいと願っていたA子は、郷里を遠く離れた東京の大学に入学、身の回りのものだけ運んで女子寮で暮らし始めた。夫は東京の出身だったが、いろいろと口うるさい親から逃れるため、毎日遅くまで家に帰らず、サークル活動に打ち込んでいた。大学のサークルで知り合うと、それからすぐに二人の交際が始まった。卒業後間もなく、そんなに焦らなくてもいいのにという夫の家族の反対を振り切って結婚したが、A子は「彼がどうして自分を選んだのか、本当に自分でいいのか、その時も今も確信が持てないまま」だと言う。夫が「敷地内に家を建てて近くに住んでほしい」という両親の申し出を断わり、二人はマンションを借りて暮らしている。

A子は、実家が遠いこともあり、結婚後数えるほどしか

実家に戻っていない。そしてA子は、今でも母親が恐い。母の顔を思い浮かべようとすると感情を押し殺したような憮然とした表情しか思い出すことができない。それは、結婚生活の中で母があまり幸福でなかったせいなのだと思うが、そのために辛くあたられたことは、簡単に忘れるわけにゆかない。確かに母は、覚えている限りいつも働いていた。父が病弱で、その分、母が忙しかったのだろう。3人の子どものうち、ただひとりの女子であるA子によく手伝いをさせた。兄や弟が自由に過ごしているときも、A子は買い物や片づけものを済ませてからでないと遊べなかったし、何より、迷惑をかけない、いい子でいることが求められ、意に添わないと露骨に嫌な顔をされた。幾度か、頬を叩かれた記憶もある。叩かれて口の中が切れた時、母は何も言わずにその場から立ち去った。思春期の頃までにはA子は要領のよい叱られない子どもになったが、家族にはあまり語らず何も求めない、我ながらかわい気のない子どもだったろうと思う。

「自分には、愛情豊かな母親として子どもを立派に育てる自信がない」とA子は語った。結婚後しばらくは子どもを作らずにいたいと話し合い、夫もそれでいいと言ってくれていた。5年ほど企業勤めを続けたが、一般事務担当の女性が多年にわたって勤め続けることも苦しくなった。とりあえず退職をして暇になったこと、再就職を望んだがなかなか次の職場が見つからなかったこと、そして何より、夫の両親から孫を切望された、などの事情が混ざり合って、どうしたらよいものかと悩んでいるうちに妊娠。予定外だったが、いい機会だという夫の言葉に押されて出産を決意する。妊娠中も戸惑うことが多く、後半は心が重く、訳もなく涙が出たりしていた。自分なりに一生懸命やってきたつもりだが、なぜ他のお母さんのように、手放しで子どもがかわいいと思えないのだろうか。

(2) B子の事例その1

劇団員であるB子が、突然強い不安に襲われて神経科クリニックを訪ねた。何年ごしかの努力が実り、はじめて大きな役を手に入れた直後のことだった。

ある日、いつものようにアパートを出て劇団に向かおうとしたB子は、いきなり息苦しさを覚える。額から脂汗がたらたらと流れ出て、このまま呼吸が止まって死んでしまうのではないかと思った。検査の結果、身体的異常は見あたらず、不安発作と診断された。一人ではいられず友人に付き添ってもらう状態から、次第に症状は軽減してきている。けれども、また発作が起こるのではないかという不安はなかなか消えず、せっかく手にした役も辞退せざるを得なかった。劇団員としての将来には、もうほとんど望みが持てないだろう。これまで何のためにあれほど頑張ってきたのか、今後、何を目標にすればよいのか、など考えると絶望的な気持ちになる。自分について、自分の将来について考え直してみたいということで、投薬に加えてカウンセリングが導入されることになった。

B子が演劇に興味を抱いたのは、大学受験に失敗した後のことである。医大を目指して受験勉強したが、2年にわたって合格を手にすることが出来なかった。唯一受かった他学部に入学金を納めたものの、大学に通う気もせず、かといって仮面浪人に徹するのもすでに苦しく、予備校をさぼって繁華街を歩くようになった頃、ふと惹かれて観劇したのがはじまりだった。お腹の深い部分がずんずんとかき回されるような衝撃で、こういうことこそ本当はやりたかったのだと思った。劇場に何度か足を運んでいるうちに、生涯ここでやっていきたいと強く願うようになった。

B子は父母と兄の4人家族である。内科医の父が自宅で開業し、母が経理と雑用を引き受けている。苦虫を噛みつぶしたような顔の父と、気さくで誰とでもすぐに親しくなる母と組み合わせで医院はうまくいっているようだ。今でこそ複数の職員を雇っているが、B子が幼い頃は夫婦二人で多くをこなし、兄とB子は店屋物を夕食に取ることが多かった。

父は頑固で口が悪く、見ること、聞くことにいろいろと難癖をつけた。仕事のことで母にも文句を言った。子どものことはあまり構わなかったが、医院の跡取りだからと、兄の勉強だけはとても熱心にみていた。B子はそれを遠巻きにして直接父と接することはほとんどなかった。兄からは、自由が与えられ気ままでいいと見られていたようだが、B子としては両親の関心を得ている兄がうらやましかった。その兄が医大生時代、父と大喧嘩して家を飛び出したところから事情が一変、B子の将来計画がねじ曲げられる。「女の子は無理して頑張ることはない」と言われ、すでに附属短大進学コースを選んでいたB子に父が医学部受験を強要した。高校2年生の3学期のことで、担当教師も半ばあきれていた。が、「遠い存在だった父がぐっとこう身を乗り出してくるようで」威圧され、戸惑いながら進路変更に同意すると、すぐに複数の家庭教師がつけられ医学部合格が至上命令となった。母が内心でどう思っていたのかはわからない。積極的に医者になれと薦めることはなかったが、父に反対してくれたわけでもない。言

い出したらきかない父の性格を考え、何を言っても無駄と早々に腹をくくってしまったのだろうか。

案の定、結果は惨敗。落胆した父はB子の心情を省みることなく、「女のお前にこれ以上期待するのも間違い」と言ってすっかり受験から手を引いてしまった。劇団にはいるというのは、この先どうしたらいいかよくわからなくなった時に出てきた考えだった。とりあえず籍を置いた大学だけは卒業すること、週に一度は実家に顔を出すことを条件に、劇団入りと下宿生活を許可してもらったのが、5年前のことである。

(3) 2事例が体験した家庭における性別による育て方の違いについて

まずは、A子、B子それぞれが源家族の中で実際に体験した「性別による育て方の違い」を拾ってみよう。

A子の事例では、男女に課せられた家事労働、分担量の差に注目することが重要だろう。3人兄弟のうち女であるA子に家事手伝いが求められ、それをやり終えないと兄弟と同じように遊べなかったという。また、分担に抗議したり不満を言うと叱られた。求めに応えても、誉められず、むしろやって当然、やらないと母に「露骨に嫌な顔をされた」とA子が理解していた点を抑えたい。また、「迷惑をかけない」、「意に添うこと」、「いい子でいること」などの表現から、このような家庭文化を無抵抗に受容する従順さがA子に強く求められていたこと、そして、そうでないと母の愛情が撤回される、つまり愛情を受けるに値いしない嫌な子だという否定的自己像を引き受けなければならなかったことがわかる。幼いA子には、なかなか強力な、また理不尽なメッセージだったと思われるが、このメッセージまで含めた一群の期待がA子に用意された家庭教育の中身である。そしてこの家庭教育は、残念ながら、それを受け入れても拒否してもどちらにしろA子の中に否定的自己像を喚起するものだったようだ。

高校卒業と同時に家を出たA子は、実家から消えるようにいなくなりたいと望んでいる。つまり、課せられた期待や教育にしっかり感化されることなく、また、ぶつかるのでもなく密かにそれを免れたいと思ったらしい。どちらに転んでも否定的な自分に行き着くような構造を持った家庭教育の中で、A子が選んだ対抗策である。父母にほとんど何も求めず、上京後も、滅多に里帰りしない暮らしぶりから、A子の親離れは本当の意味での自立というより、Bowenいうところの「情緒的遮断」に近いものだったと推測される。いずれにせよ、自分に向けられる否定的イメージを受け付けないために、家庭が提供するもろもろの体験からA子が距離をとり続けたのだとすれば、彼女が払った犠牲は多大である。

B子の場合には、家事分担の差について、ほとんど何の言及もない。B子にとって大きな意味を持った家庭教育の男女差は、もっぱら、子どもに寄せる期待や関心の強さの違いにあったようだ。この点に関して、兄とB子はお互いを羨むほど強く、性別による育て方の差を意識している。両親の積極的関心をほとんど受け取ることができなかったB子は強い期待を背負った兄を羨んだし、医院のよき継承者たれと強要された兄は、自由な身のうえの妹に嫉妬した。この意味では両性が性別によるデメリットを体験したと言うのがよいだろう。ただしここでも、兄の置かれた状況が、うまく期待に応えれば喜ばれ、肯定的評価を手にするものだったのに対し、女性であるB子が置かれた状況は、それに甘んじても抵抗してもいずれにしろ肯定的評価を受けることはない。B子が、自分は親にとって関心を寄せるほど価値のない存在なんだという否定的自己像を作り上げて不安になったのも無理からぬことと思える。

その兄がある時、期待された立場を振り捨て、家を飛び出すという行為を起こした。結果として、医院の跡継ぎが突然B子に求められるようになった。両者の立場が家庭の中で入れ替わったわけだが、変化の推進者である兄に対し、B子はあくまで受動的立場で事態と関わり、「従順」で「素直」な娘として医者になれという法外な親の期待を受け入れている。仮にB子が順調に医大に合格したとして、一連の変化によってB子の自尊心が高まった可能性は、果たしてどれほどのものだったろう。

A子、B子の臨床的問題について、多面的に考察することは本論の主旨ではない。ジェンダーの観点から一言述べるなら、女児を養育するA子が自分の幼年期や母との関係に思いを馳せるのは、ある意味で、この時期がもたらす必然的感情であった。また、この先何をしたらよいのかわからない状態になったB子は、父に振り回された進路選択をめぐる一連の出来事に、もう一度目を向けないわけにゆかなかった。かつて大いに苦しみ、ある部分未解決のまま残してきた問題と向き合うことが、いま容赦なく二人に求められたことになる。それはもちろん大きな試練であるが、同時に、家庭教育の中で果たすことが出来なかった「自尊感情と自己信頼を持った自己肯定的な女性となる」ための、そして、そのような肯定的ジェンダー・イメージを獲得しなおすための格好の機会の到来ととらえられるのではないだろうか。

(4) 両性による家庭文化の創造

続いて、上述のような性別によって異なる家庭教育を生み出した存在として、A子、B子それぞれの両親に目を向けてみよう。

意識的であれ、無意識であれ、夫婦は家庭を持ったその時から、家庭文化の担い手、または創造者として、次世代の子どもたちにその文化を伝達する役割を担う。A子、B子の体験もまた、二人の両親が創り出した文化の文脈の中で生じた出来事と理解する視点が重要である。

二人の家庭文化は、それぞれの両親がどのようにして生み出したのだろうか。A子の場合は、「感情を押し殺した憮然とした表情」、「忙しく働いていた」、「露骨に嫌な顔をした」など、父親より母親の姿がはるかに詳細に報告されている。また、B子の例はその逆で、母のありようがどこか不鮮明、「口が悪くいろいろなことに難癖をつけた」、「女の子は無理して頑張ることはない」、「女のお前にこれ以上期待するのは間違い」など、父の価値観が家庭文化全体に強い影響を与えたようだ。両性が対等に家庭文化の創造に関わった、というより、二人の考えがよほど一致していたか、あるいは、どちらか一方の価値観が無批判に結婚後の家庭に持ち込まれ、もう一方は無抵抗、無関心などの姿でそれを容認したと想像される。

Carter&McGoldrick [1989]、平木 [1996] らが展開する家族のライフサイクル論では、結婚による両性の結合期の発達課題を「夫婦が相互に適応し、どちらも納得のゆく家族の価値観や役割分担を選ぶこと」としているが、残念ながら両家に関して、意識的な選択の経緯を辿ることは難しい。従って、その次の課題である「両性による子どもの養育・教育」方針の決定も、それがどのようになされたか、ほとんど明確でない。このようなスタイルの両性の結びつきからは、「折り合う」、「多角度から検討する」、「新しく創り出したり選び直したりする」などの姿勢は残念ながら生まれにくいのではないか。その結果、父または母が抱くジェンダー・イメージが検討の余地のない、批判の対象にすることもできないものとして、次世代に無自覚に押しつけられた可能性は高い。押しつけが早期に生じれば生じるほど、子どもはなすすべなく、それを受け入れざるを得ないだろう。

A子の場合には、病弱な父親に代わり、実質的に家庭を切り盛りしたのが母親だった点に留意しよう。母親その人が、女性は下位に控えて家族に尽くすべきという昔ながらのイメージの推進者となった。彼女は家庭に大きく貢献した人物であるのだが、それによって女性である自分が持つ力を確信し、自分や女子であるA子をエンパワーすることはなかった。状況の中でやむを得ず家族を支えたのであって、母にとっては不本意な状態だったと想像されよう。

A子にとって母親は自己犠牲的な忍従の姿を娘に見せ、自分と同じ立場に留まるよう娘に伝えた存在である。B子の父親は、高見から批判的、他罰的な物言いで、謂われもないのに潰され価値下げされた女性像をB子に押しつけた人となった。二人の認知がどこまで父母の本意であったか、また、現実と合致していたかはわからない。が、A子、B子の二人がこのような女性観から出発し、それぞれに自尊心に満ちた自分を見出そうとすれば、前者の場合には母親を振り捨てて裏切るような、後者の場合には父親と真正面から対決するような内的作業をいずれにしろどこかで二人は果たさなければならなかっただろう。

4. 家族臨床の実践とジェンダー

再び事例に戻ろう。A子、B子のカウンセリング・プロセスを簡略にまとめて示したい。そして、ジェンダー・バイアスを是正するための試みとして家族臨床を位置づけた場合、それぞれの事例の展開がどのように読みとれるかについて検討する。

(1) A子の事例その2

インテークのプロセスが終わり、はじめに試みたのは、夫の家事や育児への参入である。A子が求めたことでもあり、セラピストからも「二人で話をする時間を頻繁に作ってみてはどうか。早めに帰宅したり、実際の子育てにもいろいろ手を貸してもらえるとありがたい・・」と言って夫を激励、あるいは依頼した。もともと安定した夫婦関係で、夫もカウンセリングに積極的に参加し、A子の家事・育児の負担は実質的、精神的に大いに軽減した。娘を叩くことも短期間で消失。事態はこのままよい方向に向かうかと思われた。

ところが、しばらくすると、A子が抑鬱感を強く訴えるようになる。自信のなさや申し訳なさ、心の暗部に巣くっているという攻撃性が湧いてきて抑えられないと言う。夫に感謝しながらも、細かい癖が気に障っていらいらしたり、アドバイスが素直に受け止められず、結婚後ほとんどはじめてというけんかが頻発する。当惑気味の二人に、セラピストは「これまで以上に深く関わると、お互いの違いがよく見えてくる。このプロセスがとても大切」と伝えた。

やがてA子は、「子育ても出来ないだめな自分」のイメ

ージを払拭したいと決意。納得できるまで夫の力は借りない、仕事を持たない主婦は、育児を人任せにするのも違うと思うと、働く母親であるセラピストへの複雑な思いも口にしながら、「一人前の母親」になるために公園の母子集団に加わったり、何組かを家に招待するなど、試みる。そんな努力が実ってか、娘がますますA子と添い寝し、A子の関心を引きたがるようになったと報告されるようになった頃、A子から「子どもから求められている手応えがある。可愛さのようでもあるし、それと紙一重の恐い感情のようにも思う。もっと娘に我慢させ、自分を求めるようにし向けたくなる。」、「母にもこれと似たような感情があったのではないか。私はいつも母からじらされ、我慢させられていた。」という鋭い洞察が語られた。さらに、「この状態はどうも手応えがない、二人の間に自分も入りたい」という夫の言葉を契機に、あらためて夫婦の協力体制を敷こうと合意。「一人でやることもあっていいし、夫と一緒にやることもあっていい」と言うA子に、セラピストが「夫が一人でやるというのはないのか」と問うと、「相手が望めばそれもあっていい。でも、自分から頼むのは気が進まない。」とのこと。「大事なところなので後で二人でよく話し合おう」と夫がユーモアを混じえて応え、セラピストも、次の回に二人の話し合いの結果を聞くという方法に賛成した。

「(娘は)かなり頑固で言い出したら決してあきらめない。女の子なのにこんなふうでいいのかと心配になる。そんな娘を見ていると自分にも似たようなものがあったのではないかという気がしてくる。限られた人にしか見せないし、それにつきあう人は大変だろうが、自分にとっては芯というか、大切なもの。娘のそんな面を潰さずに私たち二人で大切に育ててあげられたらすごくうれしい。」A子が面接室に最後に残した言葉である。

(2) B子の事例その2

幼少期から、女は無理することはないと親に決めつけられ、ずっとそれに縛られてきたこと、そして、進路選択から劇団入団までの激動のいきさつをカウンセラー相手に話すうちに、B子の中で次のようなことが明確になった。つまり、「今回、大役をもらって仲間や監督からとても厳しく求められた。片時も気を緩められない感じ。人からあんなに強く何かを期待されたのは、大学受験のあの時以来」との由。

不安発作が起きたのは、皆の期待に応えたい、そのためにはどんなことだってしようと強く願った時だった。両親を劇場に招待し、ついに成功した自分を見てもらうのだというファンタジーがどんどん拡がってしまったようだと語られる。劇団に飛び込んでからは、親の支配から逃れたつもりだったが、まだ両親に認められたいと思っている、そんな自分が情けないというB子に「つらいね」とセラピストが声をかけると、B子の目から大粒の涙がぽろぽろとあふれてきた。

次の回には、「あまり友人に甘えてもいられない」と、不安発作以来転がり込んでいた友人のアパートを出る計画が語られる。いったん実家に戻るのが一番いいのではないかと思うとのこと。心の病気を患っているなど、絶対に父に言えない、だから今は実家に戻れないと強く主張していたB子だったが、成功した自分しか見せられないのは惨めすぎる、等身大の自分をそのまま伝えて受けとめてほしいのだと言う。セラピストも大きく同意するが、計画を実行に移すのはなかなか容易なことではない。まず、母になら話が出来るかもしれないと父の留守をねらうが、いざ実家を訪ねようとすると吐き気と動悸が襲い、からだが立っていられないほどしんどくなる。結局その日は何もせず友人宅に戻る。次の機会には電話で母を近くの喫茶店まで呼びだし、しどろもどろ何とか事情を説明することができる。母は予想以上に淡々とした表情で状況を聞き、B子を実家に連れて帰ることを提案。ひとまずほっと安堵するが、その後、病気の話題には一言も触れようとせず、果たして母に何がどこまで伝わったのか、B子は確信が持てなくなってしまう。家でも時間のやりくりをすれば、ほとんど父と顔を会わさずに暮らしてゆくことができる。昼間、母といて彼女の語る話に耳を傾けているうちに、一代で財を築いた父の苦労に同情的な気持ちが湧いてしまうし、母の様子からも自分の状態を父に隠しておきたいような素振りが感じ取れるしで、このまま波風を立てないのが一番いいのかもしれないという迷いが再び頭をもたげてくる。

そんな状態の中で、もう一度、問題を直視する契機になったのは、劇団からかかってきたB子の状態を尋ねる一本の電話だった。たまたま家にいた父が受け答え、「まだそんないかがわしい奴らと縁を切っていないのか」とびっくりするほどの怒鳴り声をあげる。かつて何度もB子を震え上がらせた声だ。そして、もう二度と見たくないと感じていたものすごい形相で母とB子を睨み付ける。母はあわてて弁解しその場を繕おうとするが、そんな二人の様子を見ているうちに、不思議とB子は動悸が治まり頭がさえていったと言う。女であるために感じてきた劣等

感のこと、自分なんて生まれてこなければよかったと何度も思い、とうとう心の病気になってしまった。父の怒りがずっと恐かったが、いつもこちらを向いてほしいと思い続けてきたことを語り、でも今はもうそんな気持ちはないし、この先、劇団を辞めるつもりもない。こんな状態ではいつまでも裏方どまりかもしれないが、劇団での生活が一番気に入っていることを話した。そこまで言葉にして顔を上げると、何だか父が縮んでしまったように感じられた。いろいろなことを犠牲にして頑張ってきた人なのだろうが、不満ばかりが今でも山のようにあって、子ども達も二人とも離れてしまった。とても孤独で可哀想な人だなと、非常に冷静な気持ちで父を見ることができた、と言う。

(3) カウンセリング・プロセスの検討

二つのカウンセリング・プロセスをまとめれば、いずれも「家庭教育の中で身につけた否定的自己像とジェンダー・イメージを払拭し、自尊感情と自己信頼を獲得してますます自分らしさを認めてゆく経過」ということができるだろう。A子の場合は、まず自分の娘とぶつかり、次にあれほど感謝していた夫に怒りの感情をぶつけ、家事分担に関する話し合いをA子が中心になって始めた。また、B子の例では、成功した自分を親に見せたいというファンタジーを捨て、ありのままの姿で実家に戻り、症状を抱えて苦しみながら劇団でやってゆきたいと思っている自分を隠さずに父親に伝えた。二人は、かつて選んだ「あまりぶつからず周囲から距離を取って安定する方法」と「従順に親の期待を受け入れる姿勢」を捨て、最後まであきらめずに自分の姿を伝えようとし続けた。そんな姿勢と一連の行為の中で、上述の課題がしだいに達成されていった。

自分を出して夫と深く関わることができたA子は、娘に抱く複雑な感情から当時の実母の状態を推測し、さらに「頑固で言い出したら決してあきらめない」娘の姿に自分を重ね、「似たようなものが自分にもある」し、それは「大切な」自分の「芯」だと語った。そしてB子は、家に戻ってしばらく時間が経つうちに、波風を立てない方がよさそうという誘惑に駆られるが、たまたまかかってきた電話から家族三人の衝突が起こり、ついに臆することなく父と相対することが出来た。母が語る父の話に耳を傾けたり、それをカウンセリングの中で語り、恐いとだけ思っていた父に対する認識がより詳細になったこと、並行して自己理解が進み、自分の意志が明確になったことなどが間接的にB子に役立っていたのではないだろうか。

セラピストは、A子のカウンセリングには夫婦面接という形態を、両親と直面しようというB子には個人面接で彼女を支えるという形態を選んだ。この面接形態についても、多角度から考察する必要があろう。セラピストが提案し、A子とB子が承諾する形で選んだ形態だったが、振り返って考えれば、二人にとって最も無理がなく、自分の気持ちを表現しやすいものだったと想像される。A子に夫婦面接を導入したのは、夫が協力的で二人の関係がある程度距離を取った状態で安定していたからだが、仕事の都合で夫が登場しない面接が何回かあり、初期にはA子を支えるための夫の同行という印象を否めなかった。夫婦の意見がぶつかることのほとんどない状態から、A子が不満や不安という形で自分の気持ちを表現するにつれ、二人の違いも見えるようになった。面接もまた、二人が話し合うための場になっていった。

セラピストとクライエントの関係について、無藤[1995]、河野[1995]は、セラピストが自分の価値観に自覚的になることが大いに重要と論じた。二人のセラピストである筆者も、同じ女性として自分の考えを表現したが、同時に、いくつかの選択肢のひとつとして対等な立場から提示し、A子、B子にこちらの考えを押しつけないことを心がけた。実際のところセラピストは、A子に対してB子以上に自覚的でありたいと強く望んだが、それは青年期のB子に比し、A子がすでにあるライフスタイルを選び取った女性で、その意味では価値観の多様性に心を開くことのプラス面に加えて、マイナスの影響や不安も少なくないとセラピストが想像したからである。

自分らしさを明確にしようとするとき、私達は些細な違いにも妥協せず、他者からの言葉に流されまいとことさら頑固になる場合がある。まして周囲の期待に自分を明け渡すことの多かった女性は、より一層その点にこだわる必要があるだろう。例えばセラピストは、ためらいがちに実母に会ってみてはどうかとA子に勧めたり、夫の家事分担の可能性を問うたりしたが、その提案はA子によって拒否されている。自分の考えはセラピストのものと少し異なると述べられたこともあった。このような形で独自性を発揮することで、二人は自分らしさを認めるための大きな手応えを得ていったと考えられる。

5. 終わりに代えて
—家族臨床におけるジェンダーの問題

1950年代に入ると、一般システム論を基礎理論としたシステム論的家族療法が飛躍的な発展を遂げた。その発展を後追うように、前提となる価値観について、いくつか

の批判が展開されたが、そのうちのひとつがフェミニストの立場からのものであった。

フェミニストの批判の矛先は、次の3点にまとめられる。1点目は、家族療法が家族を援助の一単位と見なすあまり、個人の欲求より家族の欲求を重んじやすい傾向があること。とくに従来、家族のまとめ役であり続けた女性に対し、集団のための自己犠牲を推奨しかねないと指摘した。2点目は、個別性を排除し抽象化を目指したシステム論は、まさにその性格ゆえ、家庭生活の個々具体的なリアリティを矮小化しかねないと指摘した。日常的出来事が個々人にどんな意味を持ったかという細やかな検討をおざなりにしがちと論じられた。そして、最後の批判は、家族の独自性を重んじるあまり、労働社会との関係で生じる核家族の構造的な権力関係に鈍感である点に向けられる。とくにセラピストが自分の権威や価値観に無自覚であると、家族療法そのものが、現行の差別的権力構造の再生産を助力しかねない。河野[1995]らの論に通じる指摘である。

家族全体にジョイニングするために特定個人に力を貸さないという「セラピストの中立性」もまた、既存の力関係の温存を援助しかねない。とりわけ虐待や性暴力が絡む家族事例では、弱者の安全保護が急務であり、家族成員に等分に関わるという理屈で男性や成人の責任が回避されていいはずはない。

このような一連の批判に応えてGrunebaum[1987]は、家族集団の倫理や関係の公平さに注目することで、フェミニストらの批判を免れる道が確保されると論じた。コンテクチュアル・アプローチ(文脈療法)を例に取り、セラピーも家庭生活も、「家族メンバー全員の公平で積極的な関与」によって進行することが重要で、家族の症状や問題は、公平なバランスが欠けていることのあらわれである。不公平さを感じ取り、それを正そうとする傾向はわれわれが本来的に持っているもので、とくに、家族のために長年尽くしながら承認・評価されなかった者の思いを聞き取ることが何より重要なスタートだというのが彼女の主張である。この観点からすれば、A子・B子が子どもの頃から抱いてきた思いをセラピストに語ることを経て、夫や父親に働きかけてみるに至った一連の流れは、公平な家族関係を取り戻す試みであったと理解することができよう。

また、Bowen派のLehner[1988,89]は、社会的に従属的立場に置かれたことで女性達が身につけてきた人間関係重視の傾向は、女性にとって足枷どころか財産だと論じ、関係の中で進む女性の自己発達を明らかにしたMiller[1986]やGilligan[1982]らの業績を讃えた。彼女はまた、自己分化を高めるというBowen的多世代理論の方法を用いて多数の女性の援助を実践した。自己分化を高めるとは、すなわち、外界の刺激や他者からの働きかけに反動的に応じるのでなく、関係に開かれつつ、その中で自分らしさを保てるほど分化した自己を作り上げることであり、A子とB子の二人が「自尊感情と自己信頼を獲得し、ますます自分らしさを認めて」いったこととほとんど同義である。

さらに1990年代にはいると、ポストモダニズムや社会構成主義によって、客観性や唯一絶対の科学的真理があるということに大きな疑問符が投げかけられるようになった。知る者と知られたことは分かち難く、知る者はすでにある文化によって色づけられたバイアスから自由になることは出来ない。知られたことは常にそのバイアスを何らかの意味で反映し、人々はバイアスを通してものごとに触れ、ものごとのある部分を切り取って世界に対する物語をストーリングしている。人々が治療を求めるのは、「そうやって作り上げられた彼ら自身のストーリング、もしくは他者によってストーリングされた物語が、彼らの充分に生きられた体験を表していないとき」、つまり、「取って代わる新しいストーリーの誕生が求められているとき」[White 1992]であるという。

学校教育における男女平等や職場での対等性が公の論理で推進される時代にあって、家庭文化は閉ざされた私的空間の問題であり、人々から広く評価されることがない。自分が置かれた家庭文化とそこでの大人達の働きかけによって、女性であることを劣った性、あるいは不十分な価値しか持たない存在とストーリングしてしまう小さな女性達は、残念ながらいまも少なくない。本論に述べた例を持って安易な一般化をすることは出来ないが、彼女らに対する有効な働きかけを考え続けることは、臨床家に課せられた大きな課題であろう。

＜参考・引用文献＞

Boszormenyi-Nagy, I. & Krasner, B. 1986 *Between Give and Take: A Clinica Guide to Contextual Therapy*. Brunner/Mazel

Carter, B.,& McGoldrick, M. Eds. 1989 *The Changing Family Life Cycle: A Framework for Family Therapy 2nd Edition*. Allyn and Bacon

Grunebaum, J. 1987 Multidirected Partiality and the "Parental Imperative". *Psychotherapy*, vol.24 no.3 : pp646-656

Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice*. Harvard University Press.

Goldner, V. 1985 Feminism and family therapy. *Family Process*, vol.24 : pp31-47

平木典子 1998「こころに優しい男と女の関係―心理臨床のアカウンタビリティの視点から」『こころの健康』vol.13 no.1：pp3-11 日本精神衛生学会
平木典子 1996『家族カウンセリング入門』安田生命社会事業団
Jordan, J. V., Kaplan, A. G., Miller, J. B. Stiver, I. P., & Surrey, J. L. 1991 *Women's Growth in Connection.* Guilford Press
亀口憲治 1998「家族心理学研究における臨床的接近法の展開」『心理学研究』vol.69 no.1：pp53-65
亀口憲治 1998「家族における父親役割の変遷と機能」『家族療法研究』vol.15：pp71-79
柏木恵子編 1998『結婚・家族の心理学―家族の発達・個人の発達』ミネルヴァ書房
河野貴代美 1995「フェミニスト・カウンセリング」柏木ら編『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房
古澤頼雄・高橋道子・福本俊・石井登美子・内田純子・藤崎真知代・藤田芳正・斎藤晃 1981「発達初期における母子交互性に関する研究（19）：性別・性別養育観・性役割観の及ぼす影響」教心23回大会：pp482-483
Hansen, J. C., & Falicov, C. J. 1983 *Cultural Perspectives in Family Therapy.* An Aspen Publication
Lehner, H. G. 1989 *The Dance of Intimacy.* Harper & Row 中釜訳 1994『親密さのダンス』誠信書房
Lehner, H. G. 1988 *The Dance of Anger.* Harper & Row 園田訳 1994『怒りのダンス』誠信書房
Miller, J. B. 1986 *Toward a New Psychology of Women.* Beacon Press
無藤清子 1995「心理臨床におけるジェンダーの問題」柏木ら編『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房
中釜洋子 1997「コンテクスチュアル（文脈派）アプローチの理解と臨床例への適用」『家族心理学研究』vol.11 no.1：pp13-26
中釜洋子 1997「海外留学中の日本人学生に対する心理援助的アプローチ」『心理臨床学研究』vol.15 no.4：pp349-360
東京都生活文化局 1994『女性問題に関する国際比較調査』普及版
東京都生活文化局 1993『女性問題に関する国際比較調査』
White, M. & Epston, D. 1990 *Narrative Means to Therapeutic Ends.* 小森訳 1992『物語としての家族』金剛出版

（なかがま・ひろこ　東京都立大学助教授）